馬の惣口伝

一、諸々の平馬を引立て見るニ、脉所たひらかなる程無病に御座候
あらく大なるほど病馬に御座候
寒熱之事
一、諸々のかん熱共ことごとくさし
おかれ息あらきをねつ（熱）にがう
す、又息しづかなる程寒にさ
だまる
病馬生死を知事
一、はな（鼻）よりき（黄）なる水いづるはか
ならず死す、又いくらやみ申
候共身ぶるひをいたし申候は死
す事なし
薬飼の事
一、薬かわせられ候に本はふみこなし
くすり筒われかやうなるは、かな
らずあしく御座候
結馬可見分事
一、ばりけつ（溲結・尿結）雨ふり申候時病出申
は久敷御座候。日てり申候時、病出
申候ははやく治す、結馬日てり
申時、やみ出申候はなをりかね申候
空くもり申、尤雨ふり申とき
病出申候はやくなをり申候
薬之加減之事
一、薬を合せられ候時、なまなる物を
にはかに御こしらへにひたる薬を
合申候ハ当座に干たる薬をば
少づつ加へ申候、久敷干申候薬
をバ御すこしに、かげんにて候
打身の薬かげん
一、打ミ腰より下は、本薬へ山薬
を御くわへ候、はるひゆひよりまへハ
せんきう御くはへ候、本薬十銭に
山薬二銭御くハへ候
薬を飼申候心得
一、何病なり共、きうにあらく病申
候は、薬大ふくにして筒かず
しげし。しづかに病申候ハ薬こ
ふくにして、筒すくなく御飼候
目之薬飼事
一、眼久敷煩申すには、薬二度ばかり
飼申候、又其後薬をさし、がん脉（眼脉）さうかう（相好）より血をとり申候、また別の
打目など候ハまづさうかう、眼脉をさして、目の内を能々冷
し、其後薬をさして、摠て諸々
の目の煩、御養生には、針にて
も又薬をささせられ候にも、いかに
も朝はやくれうじ申候、故を申
に、まなこは収（おさめ・最終）のごとくに候あひだ、いゆる事を本とす
かたなぐ馬の事
一、ゑだをかたなぎ申候ハ、五日六日計
にて候ハバ、能々冷し、四足平ゆふ
を御待候、又久敷かたなぎ申候ハ
藤こぶ、一青木葉、是を煎し
てゆでさせられ候、其後河へ入
冷して四足平ゆふを御待候ハバ良きき申候、ミつかねを少御入候、五
六日などかたなき申候えば、水かねいみ申候
ておゐ馬之事
一、きり疵などにて、口ひろきハ、ハ
つのかしらをくハへ候、矢疵、やりき
ずなどへハ、くわへ申さず候、夏の
内ハ焼塩少くはへ申候、ふゆ七日過
てくはへべし、夏ハ三日過てゆ
て申候
血之出し拍（ひょうし）の事
一、平馬の事蹤（ことがらのあと）ハ二日、三日前に
血を取申候共、息はやきハ、又
もどり申候、又二年、三年取不申候
とも息しづかにして沈なるハ取
申さす候
一、病馬息はやきをバ血を取
申候、息しづかなるをバ、とり申さず候
但かう出つあつて、かろくはや
きハ血熱也、右御書と
申候ハ桑嶋新右衛門尉御殿へ御
望まかせ上申され候書物なり
いかにもミつ書（密書）也

桑嶋新右衛門尉　仲綱
鈴木主膳介　道重

文禄四乙未　水沢清五郎　二月五日　実秀

青柳与六郎殿

進覧